



Title	嗅覚をあらわすsentir の構文と意味
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69947
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

嗅覚をあらわす sentir の構文と意味

春木 仁孝

1. はじめに

現代フランス語の感覚動詞 sentir は嗅覚以外の感覚、特に触覚、そして時に味覚をも表わす点で英語の smell とはその意味領域がかなり違うと言える。

(1-1) Elle sentait l'odeur de la cannelle provenant de la cuisine.

「彼女は台所から漂ってくるシナモンの匂いを感じていた」¹ (嗅覚)

(1-2) Il a senti une bosse sur sa nuque.

「彼はうなじにこぶ (があるの) を感じた」 (触覚)

(1-3) On sent très bien les agrumes avec une petite touche d'amande dans ce thé.

「このお茶はわずかにアーモンドの味を含んだ柑橘系の味がしっかりとする」 (味覚)
具体的な感覚以外にも、いわゆる直観を表わす用法(1-4)や Picoche(1986) が内的感覚と呼ぶ用法(1-5)(1-6)もある。後者は再帰用法の再帰構文を取ることも多い。

(1-4) Je sens le danger ici. 「私にはここは危険な感じがする」

(1-5) Je sens la fatigue / mes jambes. 「疲労を感じる / 足が疲れた (←足を感じる)」

(1-6) Je me sens mieux. 「気分がよくなった (と感ずる)」

直観を表わす用法にも近いが、本稿で見ていく嗅覚を表わす用法の比喩的拡張と考えられ、嗅覚用法とも密接につながるのが雰囲気 *ambiance* を表わす用法である²。

(1-7) Un thé qui sent Noël et idéal en cette période hivernale.

「クリスマスを思わせ、この冬の季節にぴったりのお茶」

本稿ではこのような sentir の中心的意味領域と考えられる嗅覚に関する用法の構文と意味、中でも「X は～の匂いがする」、つまり匂いを発しているという意味を表わす構文について検討していく。先ず Anne Theissen(2011)の分析を取り上げる。彼女の分析は先行研究を踏まえて sentir の構文の特徴や制約を詳細に検討した優れたものではあるものの、「X は～の匂いがする」という意味を表わす構文の分析が十分ではなく、また ça を主語とする構文の扱いにも問題がある。本稿では、それらの問題について検討を行なっていく。また日本語の嗅覚表現についても認知モードの観点などから紙幅の許す範囲で比較考察を行なう。

2. Anne Theissen(2011)の分析

Theissen (2011) は Picoche (1986) の分析と表記に基づいて、嗅覚を表わす sentir に三つの構文を措定して次のように表記して説明している。

¹ 日本語では、この種の文においては主語を明示するとやや不自然になるが、以下で sentir² と呼ぶフランス語の構文に対応させるために敢えて主語を明示して「感じる、感じられる」と訳しておく。

² 直観 intuition を表わす用法は経験者である人 (次節の Y) を主語に取り (Je sens le danger. 「(私は) 危険を感じる」)、雰囲気を表わす用法は無生物または ça (次節の X) を主語に取る (Ça sent le danger. 「危険な感じがする」という構文的違いがあるが、意味的には連続しており、意味と認知モードの観点からの検討が必要である。

sentir 1 : X sent Z (X=匂いの源、Z=匂い)

sentir 2 : Y sent Z de X (Y=経験主)、Y sent X もあり (メトニミー?)

sentir 3 : W sent X (W=動作主)

sentir1 は「XはZの匂いがする」という意味を表わす構文であり、Xは無生物もしくは生物を表わす特定の名詞句である場合と、無生物の場合に対応して指示代名詞の *ça* の場合がある。(例(1)(2)(3)は Theissen(2011)による。)

(1a) La soupe sent le lard. 「スープは脂身の匂いがする」

(1b) André sent le poisson. 「アンドレは魚の匂いがする」

(1c) Ça sent le poisson. 「魚の匂いがする」

sentir 2 は、「YにはXの匂い(Z)が感じられる」という意味を表わす構文である。この場合の sentir は受動的知覚を表わすので主語 Y は経験主であり、生物に限られる。Zはこの構文では匂いを表わす名詞 *odeur* 「匂い」、場合によっては *parfum* 「香り」といった語に限られるが、この Z (de X)は直接目的語と分析される。

(2a) Je sent encore l'odeur des prés fauchés.

「私にはまだ刈り取られた草地の匂いが感じられる」

(2b) André sentait une odeur de lavande. 「アンドレはラベンダーの匂いを感じていた」

sentir 2 は匂いの源である X を直接目的語に取ることもできるが、その頻度は低い。また X を直接目的語に取る場合は X は特定 *spécifique* でなければならず、不定名詞句や総称名詞句は X の位置に生起できない。なお、Theissen はメトニミーという説明はしていない。

(2c) Je sens les roses d'ici. 「私にはここからバラの匂いが感じられる」

(2d) On sentait le poisson dans tout le magasin. 「店中で魚の匂いが感じられていた」³

sentir3 は「匂いを嗅ぐ」という意図的な行為(動的な事態)を表わす用法であり、静的な事態を表わす *senir1*、*sentir2* とは明確に異なっている⁴。意図的な行為を表わすので、*sentir3* は使役構文や命令形で、また *être en train de* などと共に用いることができる。

(3a) Pierre sent le flacon. 「ピエールは小瓶(の匂い)を嗅いでいる」

(3b) Marie a fait sentir le flacon à Pierre. (使役構文)

「マリはピエールに小瓶(の匂い)を嗅がせた」

(3c) Sens le flacon ! 「小瓶(の匂い)を嗅いでみて」

sentir3 の構文の特徴は、*odeur* 「匂い」ではなく匂いの源 X を直接目的語に取るという点である。これは *sentir2* のように自然に、つまり受動的に匂いが感じられない状況で意図的に匂いの源である具体的なものに対して「嗅ぐ」という行為による働きかけを行なうからであると説明されている。日本語訳では「の匂い」がある方が自然な点については 5 で触れる。ただし、筆者は *sentir2* と *sentir3* は事態としては連続的であり、受動的知覚から意図的な行為へと移行する場合もあると考えるが、ここで実例を挙げて詳述する余裕はない。

³ この文を自然に訳すと「店中で魚の匂いがしていた」となるが、そう訳すと *sentir1* の場合と日本語では区別がつかなくなるので、*sentir2* の例文は既に述べたように「感じる、感じられる」を用いて訳しておく。

⁴ *sentir1* の X が擬人化されて「(意図的に)匂いを発する」という意図的な行為を表わす例外的な発話も存在する。

3. sentir1 に関するいくつかの問題

以下では sentir1 について、Theissen (2011) の分析で触れられてはいるものの、記述や説明が不十分な問題について検討していく。sentir1 の定式を再掲しておく。

sentir 1 : X sent Z (X=匂いの源、Z=匂い)

Z は必須ではないが、Z がない場合の意味は常に「いやな／腐った匂いがする」である。

(4a) La viande sent. (= La viande sent mauvais.) 「肉はいやな匂いがする」

(4b) La soupe sent bon. 「スープはいい匂いがする」

それは X が通常の匂いや X らしい匂いを発している場合は特に匂うことを言う必要はないわけであるし、また普通は匂わない物や場所について匂いのタイプを特定することなくわざわざ匂うと言うのは発話者の注意を引く変な、あるいはいやな匂いがしているからである。いい匂いがすることを伝えるためには X sent bon と表現しなければならない⁵。

また(4b)のように、Z なしで bon / mauvais のみを伴う構文は頻度も高い。この場合の bon / mauvais は辞書などの記述では副詞とされているが、それではどうして通常予想される bien / mal ではないのだろうか。それは X sent Z の Z が直接目的語ではないということとも関連しているが、この場合の bon / mauvais は動詞の働きを修飾しているのではないのである。例えば parler bien / mal は、話すという行為の質がよいか悪いかを述べているが、sentir bon / mauvais は主語 X の発する匂いが良いか悪いかを述べているのであり、「X は bon / mauvais と言える匂いを発している」と言い換えることができる。念のために付言しておくならば、bon / mauvais は X sent という事態全体にかかる文副詞的な働きをしているわけでもない。従って、sentir1 と共起する bon / mauvais は副詞ではなく、あくまでも形容詞と分析するのが適切である。関連して、副詞の様に見えながら実際は主語に同格的にかかる形容詞の例は、以下の発話に見られるようにフランス語には数多く存在する。

(5a) Il est mort *jeune*. 「彼は若くして亡くなった」

(5b) Cette soupe se mange *froide ou chaude*.

「このスープは冷たいままでも温めても飲めます」

ただし(4b)の bon は主語ではなく主語 X が発する odeur / senteur 「匂い」と同格なのである。この「匂い」は動詞 sentir が含意しており、X sent という構文に意味項として内在していると考えられる。動詞がマナーやトラジェクター、その他の要素を内在化しているというのは普遍的に見られる現象であるが、詳しい検討は別の機会に譲りたい。

次に Anne Theissen は sentir1 の X に関して、二つの側面があると述べている。一つはその匂いを発する場、つまりは匂いの源 source であり、もう一面はその匂いを持っていること、発することは X の属性の一つである。彼女はそれ以上は述べていないが、文字通り X が台所のように場所の場合と、X がスープや肉といった物理的に自ら匂い成分を発している場合とでは X の性格がやや違うと言わざるを得ない。スープや肉は匂いの源としての場であり、その匂いはそれらの属性の一つであるが、台所という場所が何らかの匂いを感じ

⁵ X が通常の匂いや X らしい匂いを発している場合は、フランス語では sentir2 の構文を取ると考えられる。(cf. (2c))

させるときには、匂い成分を発しているのは台所にある何らかの別の物質のことが多いのではないか。そのような場合は台所は匂いの源を包摂しているより広い意味での場所としての X であると考えられる。その場合、その匂いは台所の一時的な属性と言えなくもないが、より直接的にその匂いの源である物の存在が想定される。このように考えると sentir1 の X には二つの場合があることを認めなければいけないのではないかと思われる。

(6) Mon appartement sent la peinture fraîche et le linoléum neuf.

(Gaële Faye, *Petit pays*, 2016, p.13)

「私のマンションは塗り立てのペンキと新しいリノリウムの匂いがしている」

(7) L'air sentait bon la brume estivale. 「空気は夏のもやのいい匂いがしていた」

(L. Gounell, *Le jour où j'ai appris à vivre*, 2014, p.12)

(6)ではマンション *mon appartement* はある種の匂いが漂っている場所であるが、匂いそのものは塗り立てのペンキと新しく敷かれたリノリウムから発しているもので、マンションが直接その匂いを発しているのではない。確かに場としてのマンションがある匂いを持っているとも考えられるが、見えなくともペンキ塗り立ての部分やリノリウムが真の匂いの源として認識され、その存在が聞き手の認識の中に想定される。(7)の場合も空気 *air* は広く大気全体を指しており、夏のもや *brume estival* はその中に含まれているのである。

ただし注意しなければいけないのは、*sentir1* の Z に現われる名詞句は匂いの源である特定の物を指示しているのではなく、匂いのタイプを指定しているという点である。

(8=1b) André sent le poisson. 「アンドレは魚の匂いがする」

(8)では André がたとえば魚の入った買い物袋を持っているような場合もあるが、あるいは André が魚屋であったり、少し前に魚に触れていたために魚の匂いがしている状況が考えられる。いずれにしろ、(8)の発話を発した人は André に魚の匂いを感じているのであり、その意味で André は匂いの発する場所、源であり、またその時点において魚の匂いがするという属性を André が持っていることになる。魚 *le poisson* という名詞句はあくまでも匂いのタイプを特定しているのであって、たとえその時点で André が特定の魚を持っていたとしても、匂いの源であるその魚を指しているのではない。従って、(6)の場合も塗り立てのペンキと新しいリノリウム *la peinture fraîche et le linoléum neuf* は匂いのタイプを特定しているのであって、そのマンションの中にペンキ塗り立ての部分や新しいリノリウムの床材の存在を想定させはしても、それらを直接的に指示しているのではない。

結局、(8)の発話は André は何らかの匂いを発しており、その匂いが魚の匂いであるということ述べており、魚の匂いは「匂う」という事態において André、より厳密には André が発している「匂い」とイコールの関係、つまり同格的な関係にある。従って、*sentir1* の X sent Z の Z は直接目的語ではないということになるのである。既に指摘されているように、X sent Z の Z を直接目的格代名詞によって代名詞化したり、分裂文によって焦点化することができない所以である。

比較のために *sentir2* が X を目的語に取っている例文 (Y sent X) を再掲する。

(9=2d) *On sentait le poisson dans tout le magasin.* 「店中で魚の匂いが感じられていた」この例文では魚 *le poisson* はその店で売られている食材としての魚、つまり魚肉 (の匂い) を指している。魚 *le poisson* は匂いの源であり、メトニミーによりそれが発する魚の匂いを表わしている。静的ではあるが他動詞文であり、*le poisson* は直接目的語であるので必要により代名詞化できる (cf. *On le sentait dans tout le magasin.*)。

以上の分析から、*X sent bon / mauvais* の *bon / mauvais* という形容詞と *X sent Z* に現われる名詞句 *Z* は、発話に内在する意味項「匂い」と同格関係にあるという点で同列に扱うことが許される。そしてこのことは、以下に見る問題にも密接に関係しているのである。

Anne Theissen は *sentir1* について例(7)に見られるように、*X sent bon / mauvais Z* という動詞に後置された名詞句 *Z* と *bon / mauvais* が共起する発話が存在することには言及しているものの、どうしてこのような構文が可能になるのかという点については全く等閑に付している。筆者が採取した類例をさらに挙げておく。

(10) *La cuisine sent bon l'oseille.* (poème de Maurice Carême)

「台所 (で) はスカンポのいい匂いがしている」

(11) *Le jardin sent bon le citronnier.* 「庭 (で) はレモンの木のいい匂いがしている」

(12) *Ça sentait bon l'air marin!* 「海の空気のいい匂いがしていた」

(Laurent Gounelle, *Le jour où j'ai appris à vivre*, 2014, p.42)

(12)のように *ça* が主語である場合は *ça* が *Z*、つまり *l'air marin* を後方照応的に先取りしていると見えるかもしれないが、(10)(11)や後で見る *ça* を主語に取る構文の分析からもそうではないことは明らかである。Anne Theissen が *bon / mauvais* と名詞句が共起するこの種の構文を特に問題にしないのは、後置された名詞句が目的語と分析できないにしろ、*X sent Z* という構文に *bon / mauvais* という副詞が付加されただけと考えているからであろう。つまり、*Il parle mal japonais.* 「かれは日本語を話すのが下手だ」のような目的語名詞と副詞を取る発話と並行する構文と考えているのではないかと推察される。しかし既に見たように *bon / mauvais* は副詞とは分析できないので、違った観点からの説明が必要である。

上で見たように、*sentir1* の構文に *Z* として現われる名詞句は匂いのタイプを指定していて、同格的名詞句と分析できる。一方、*bon / mauvais* も主語である *X* の発している匂いの質について述べている同格的形容詞と分析できる。いずれも同格句であれば、項ではないので意味的に整合すれば共起可能であると考えることができる。以下の(13)では *jeune et anonyme* と二つの形容詞が一つの同格句を構成しているようにも見えるが、*jeune* 「若い」と *anonyme* 「無名の」という形容詞は意味的には異質であり、それぞれが主語に同格的にかかっていると考えられる。

(13) *Il est mort jeune et anonyme.* 「彼は若くして無名のまま亡くなった」

同じ品詞であるが故に *et* で結ばれているだけであり、やはり二つの同格句が共起していると考えられる。*sentir1* の(10)などの場合は同格句の品詞が異なるだけである

4. sentir1 が ça を主語に取る場合

Picoche (1986) は、sentir が ça を主語に取る場合を特に説明もなく非人称として sentir1 と同列に考えている。Anne Theissen も sentir1 が ça を主語に取る場合を主語 X が無生物である場合のバリエーションと考えているようである。

(14) Ça sent bon ! 「いい匂いがする」

(15) Ça sent bon (par) ici ! 「ここはいい匂いがする」

(16) Ça sent bon dans la cuisine ! 「台所はいい匂いがする」

(17) Ça sent bon la mer ! 「海のいい匂いがする」

ただし Anne Theissen はこの種の構文を非人称とする分析を批判する⁶。そもそも sentir1 には il を主語とする本来の非人称構文が存在しない (*Il sent bon.)。次に ça を主語に取る構文 (ça pleut, ça gèle) と非人称構文 (il pleut, il gèle) を並行的に持つ気象動詞に関して、Cadiot(1988)や Corblin(1994)らが ça を非人称主語ではなく何らかの指示対象を持つと分析していることに基づいて、sentir1 の主語 ça も同じように分析するのがよいと考える。その指示対象は Corblin が気象動詞について述べている「(状況) と区別できない指示」と同じように考え、sentir1 の主語の ça はその発話の表わす事態が含まれる状況を指示していて、匂っているのは周りの空気 l'air ambiant だと主張する。結局、Anne Theissen にとっては X の位置に現われる ça はあくまでも匂いの源なのである。従って、彼女にとって ça を主語とする場合も X sent Z という sentir1 の構文の一つの現われに過ぎないのである。

筆者は、気象動詞や Ça sent bon ! を始め Ça glisse ! 「すべる」、Ça mouille ! 「濡れる」、Ça éclabousse ! 「水しぶきが跳ねる」、Ça craint ! 「やばい」など指示的とは考えられない ça を主語に取る <ça+動詞> という構文の一連の発話に関して検討を重ねてきた。詳しくはそれらの論考を見ていただきたいが、ここでは簡単に筆者の考えをまとめておく。

Ça sent bon ! の場合も含めて、これらの発話における ça は何かを指示しているのではない。ça の働きを取って言うならば、発話者 (= 認知主体) が発話を生成している発話の場に発話内容を定置する働きをしていると言うことはできるが、それは発話がなされている状況を指示しているということではない。ça は指示対象を持っていないのである。むしろ <ça+動詞>⁷ でその発話が表わす事態を認知主体が身体的インタラクションを通して認知していることを表わしているというのが筆者の主張である。

このような観点から sentir1 の場合を考えてみると、匂いを感じるというのはまさに身体的インタラクションを通して認知される典型的な事態であると言える。つまり理論的な「身体的インタラクションを通じた認知」という定義に、sentir1 に個別的な、そして具体的な認知がまさに重なりあっているのである。従って Anne Theissen が言うように、匂っているのは周りの空気 l'air ambiant だというような ça の指示的な解釈が説得力をもってそれら

⁶ Picoche(1986)は x sent z の x が厳密に述べられないときに ça を用いると言っているが、例えば(16)は La cuisine sent bon ! とも言えるのであり、la cuisine 「台所」を選ばずに ça を主語に選んでいる理由があると考えられるべきである。

⁷ Ça sent bon ! の場合は bon が共起している。また、例えば痛みや痒みを表わす発話では痛みや痒みを感じている身体部位が共起するような場合もあるが、それらも含めて <ça+動詞> でこの構文を代表させておく。

しく響くのである。またそれだからこそ、*ça pleut, ça gèle* のような気象動詞の場合には *ça* を主語に取る発話が方言的であるとか、規範的ではないという印象を持つネイティブが多いのに対して、*Ça sent bon!* を始めとして *sentir1* の場合は *ça* を主語に取る表現は日常的に非常にありふれた発話として存在しているのである。

Picoche(1986)は匂いの源がはっきり述べられない場合に *ça* を主語に取ると言っているが、それについては既に脚注 6 で批判した。ただし、既に述べたように *sentir1* の構文の X には匂い成分を物理的に発している厳密な意味での匂いの源の場合と、ある匂いが漂っている場所とを分ける必要があるという問題ともこの点は関わっている。匂いその発話を発している認知主体に感じられているということは、認知主体がいる場所を X として表現することはできるはずである。しかしその場合でも、物理的な意味での匂いの源は目に見えなかったり特定できない場合もある。だからといって、物理的な意味での匂いの源が特定できない場合に *ça* を主語に取ると言えない。むしろ *ça* を主語にしている場合は、匂いの源を特に問題にせず匂いそのもの、あるいは匂いの良さや悪さ、あるいは匂いのタイプに焦点が当たっていたりする場合が多いのではないだろうか。(14)の様に *Ça sent bon!* 「いい匂いがする」と言う場合は、料理や花といったいい匂いを発している物がその場に居る発話者と聞き手には自明であって、いい匂いの存在そのものを感嘆的に述べていることも多い。*Ça sent (mauvais)!* 「いやな匂いがする」という場合も同じくいやな匂いの存在そのものを述べるのが発話の目的である。もちろん、この発話によって匂いの源の探索が促されるという側面もあるが、それは発話の語用論的効果である。

(18) *Ça sent le brûlé!* 「なんか焦げた匂いがするよ」、(「なんか雲行きが怪しい」)

(19) *Ça sent le gaz!* 「ガスの匂いがするよ」

(20) *Ça sent le moisi!* 「なんかかび臭いね」、(「なんかやばい」)

以上の例文などの場合も特定の匂いの存在そのものが問題とされており、結果的に匂いの源の探索が促されたりもするタイプの発話であるが、発話そのものは匂い(や状況)に焦点が当たっており、いずれも感嘆的なニュアンスがある。感嘆的なニュアンスがあるのは *sentir* 以外の発話でも *ça* を主語に取るときによく見られる現象であり、それはとりもなおさずこの種の発話が身体的インタラクションを通して認知された事態を表わす発話であることによることは、これまでも筆者が指摘してきたことである。

5. 対応する日本語の表現

ここで日本語の嗅覚表現を考えてみる。先ず *sentir1* に対応する日本語を見てみよう。

(21) このスープはクミンの匂いがする

(22) 雨上がりの道は土の匂いがする

X sent Z のように匂いのタイプを述べようとすると、日本語では X を主題化して「X は Z の匂いがする」という表現を取らざるを得ない。フランス語の *sentir* が、特に *sentir1* の場合は「匂い」という意味項を動詞の中に内在させているのに対して、日本語ではその意

味項を発話の項としてガ格で外在化させる必要があるのである。この場合、「Xの匂いが」の部分の主語と考えるべきか、「匂いがする」を一つの動詞と考えるべきかは検討を要する問題である。いずれにしろ、この意味項を発話の要素として外在化させる必要があるという点は、春木(2017)で指摘したフランス語が隠喩的であり、日本語が直喩的であるという特徴の顕れと捉えることもできる。簡単に述べると、フランス語ではマナーや時にトラジェクターを動詞の中に取り込んで表現することがよくあるのに対して、日本語では基本的にはマナーやトラジェクターを動詞とは別に表現することが多いということである⁸。

匂いのタイプではなく匂いの善し悪しを表現する場合は次のようになる。

(23) 珈琲のいい匂いがする

(24) 珈琲がいい匂いを{たてている／させている}

(25) この肉はいやな匂いがする

(26) バラの花が{匂っている／香っている}

この場合も「いい（／いやな）匂い」を項または要素として実現する必要がある。その項は(23)のようにガ格の場合と、(24)のように描写的にヲ格で他動詞「たてる」もしくは使役形「させる」の目的語として実現される場合とがある。一方、「匂う／香る」という匂いや香りを意味的に内在させた動詞を単独で使うと、例(26)ではフランス語の場合と違って「いい匂い／香り」という意味になる。「香る」はもともとプラスの価値を持った動詞であるが、「におう」は一応中立的な動詞であって、匂いの良し悪しは主語や発話構造等に依存していると考えられる。たとえば「靴下がにおう」は明らかに「嫌な匂いがする」という意味になる。Xを無助詞で主題化すると「この肉匂う」のように腐った匂いがするという意味になり、「この部屋（なんか）匂う」というと「変な／いやな匂いがする」という意味になる。(25)も「いやな」を取ってもほぼ意味は変わらない。「ハ」もしくは無助詞でXを主題化するとマイナス評価の解釈になるようである。またこのようにマイナス評価の「におう」に対しては「臭う」の文字を当てるが、既に主題や発話構造からの予想があるのでこれは余剰的である。春木(2017)でも触れたが、「匂う」と「臭う」は異なる漢字を用いることで同じ動詞に対して、視覚的に評価・価値判断を取り込んでいると言える⁹。

次に *sentir2* に対応する日本語について考えてみよう。*sentir2* の例の訳について少し述べたように、匂いを感じる経験者を主語にした発話は日本語では不自然になることが多い。発話が成立しても、以下のように書き言葉的な発話になってしまう。

(27a) ?部屋に入ったマリーにはラベンダーの匂いがした

(27b) 部屋に入ったマリーはラベンダーの匂いを感じた

(27c) 部屋に入ったマリーにはラベンダーの匂いが感じられた

いずれの例でもマリーは意味的にだけでなく、統語的にも主語ではなくニ格もしくは主題

⁸ 詳しくは春木(2017)を参照していただきたいが、たとえば気候動詞はトラジェクター（雨や雪等）を内在化している。

⁹ 春木(2017)では、笑う、嗤う、微笑（わら）うのように視覚的にマナーを取り込む場合に触れたが、匂う、臭うの場合はマナーではないものの、評価について同じことをしていると考えられる。

にしないと成立しない。この点でIモード的な側面も強いとは言え、やはり他動詞構文が優勢なフランス語とそうではない日本語の違いが見られる。

結局、日本語では何らかの匂いがしていることを表わす最も自然な形式は「(Xは) への(いい/悪い) 匂いがしている」というものではないだろうか。

(28) (森は) 木のいい匂いがしている

そしてこの種の発話は *sentir* とは違って、匂いの源(X)も匂いを感じる経験主(Y)も動詞の項としては取らない。匂いの源は「Xの匂い」もしくは主題「Xは」という形で現われる。また匂いのタイプを表わす場合は「Xの匂い」の形を取る。経験主が表現されないのはまさにこの発話がIモード認知による発話だからである。この日本語の発想に最も近いフランス語の構文は4で見た *ça* を主語にした構文である。いずれも認知主体が感じる匂いに焦点が当たり、認知主体はいわばその事態に内包された形で実現された発話である。

また、日本語では(28)の様な発話の「木の匂い」は匂いのタイプを指定しているのか、実際に存在する木、つまり匂いの源を指示しているのかを決めるのは難しい場合が多い。

*sentir*₃ に対応する日本語は「嗅ぐ」である。この動詞は匂いの源を目的語に取ることはできるが、例文(3)の訳でも分かるように、「Xの匂い」のように「匂い」がある方が自然な場合も多い。ただし、会話では少なくとも命令文ではヲ格ではなく無助詞構文にすると「匂い」がなくても自然な発話になることが多い。おそらく助詞がないことでXが話題的に解釈されて、統語構造的には直接、動詞には結びつかないからかと考えられる。

(28a) ちょっとこれ、嗅いでみて。

(28b) この小瓶、嗅いでみて。

(28c) ??あいつずっと試験管、嗅いでるよ。

「嗅ぐ」に関してはもう一つ問題がある。実は「嗅ぐ」という動詞は筆者にとっては書き言葉的な語彙であり、日常語では「嗅ぐ」は犬など動物の行為にしか使わない動詞であるという点である。ほとんどの国語辞書には「匂う」に他動詞の項目はないが、特に西日本を中心に多くの地域では *sentir*₃ にあたる日本語は他動詞「匂う」なのである。

(29a) 賞味期限の過ぎたものはよく匂って(みて)から食べなさい。

(29b) このチーズ、ちょっと匂って(みて)。

(29c) その香水、私にも匂わせて。

「嗅ぐ」に比べると他動詞の「匂う」は「匂い」という言葉がなくても自然な場合が多いが、それは動詞の中にいわば名詞「匂い」が含まれているからだろう。また「ちょっと」、「よく」などの程度副詞や、行為の遂行を促す「～みる」という助動詞語尾を伴うことが非常に多い。これは受動的知覚を表わす「匂う」と差別化して、意識的な行為を意味している他動詞の「匂う」であることを明瞭にするためではないかと考えられる。

6. まとめにかえて

sentir 1 (X sent Z)をより詳しく見ると以下の様に4種類の構文が存在している。

(30) La cuisine sent. → La cuisine sent bon/mauvais./La cuisine sent les épices. →
La cuisine sent bon les épices.

X には匂い成分を発している厳密な意味での匂いの源を表わす場合と匂いが漂っている場
を表わしている場合がある。この二種類の X は包摂関係にあるため意味的には連続してい
るが、時に区別して考える必要がある場合がある。また bon/mauvais は sentir1 の構文に
共起する場合は多くの辞書では副詞とされているが、それらの記述にも拘わらず同格的に
用いられている形容詞と考えるべきである。同じく sentir1 の Z として現われる匂いのタイ
プを指定する名詞句も、内在する意味項「匂い」の同格句と考えるべきである。本稿では
この動詞が含意して発話に内在する意味項に関して論を展開する余裕は残念ながらない。

一方、名詞主語を取る sentir 1 と並行して、ça を主語に取る 4 種類の構文が存在する。

(31) Ça sent. → Ça sent bon/mauvais./Ça sent la mer. → Ça sent bon la mer.

ça を主語に取る場合は匂いの源よりも、あるタイプの匂いの存在や匂いの性質そのものに
焦点が当たっている。さらにこの種の発話の ça は指示的ではなく、匂いの源を表わしては
いない。このように、(31)のタイプの発話と X が名詞句の場合とは発話の性格が違うので、
sentir1 に二つの下位グループを立てるか、あるいは ça を主語に取る場合は別の構文とす
るべきであろう。そして、(30)がいわゆる D モード認知的な発話であるのに対して、(31)
は身体的インタラクションを通じた I モード認知的な発話である。

日本語においては嗅覚表現は基本的に I モード的な発話であって、もっとも自然な形式は
経験主を表現しない発話である。一方、他動詞構文が優勢であり D モード認知的な側面も
持っているフランス語においても、本来的に身体的インタラクションに関わる嗅覚表現の
領域においては、日本語にも通じる I モード認知的な発話も多いことが確認できた。

参考文献

- 春木仁孝(2012a) 「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』38,
pp.46-65. 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 春木仁孝(2014b) 「ÇA を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48, 63-84. 日
本フランス語学会.
- 春木仁孝(2017) 「直喩的な日本語、隠喩的なフランス語」『時空と認知の言語学』VI, 31-40.
大阪大学大学院言語文化研究科.
- Cadiot, P. (1988), « De quoi ça parle ? À propos de référence de ça, pronom-sujet », *Le
français moderne* 56 3/4 : 174-192.
- Corblin, F (1994) « Existe-t-il un ça impersonnel en français ? », *L'information
grammaticale* 62 : 45-47.
- Picoche, J. (1986) *Structure sémantique du lexique français*, Paris : Nathan.
- Theissen, A. (2011) « Sentir : les constructions prédicatives de l'olfaction », *Langages*
181 : 109-125.